
バイブル

YUIKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイブル

【著者名】

YUIKA

N6597B

【あらすじ】

とつまホントの話しさです。よんでもういいwww

あなたは友達を信じますか？

出会い

ともだちつてさ、そんないしたもんじやないと思つ。つてか必要なときに使えばいいじゃん。ともだちつてのは、利用するもんなんだよ。そして、アタシが軽蔑すんのは、「信じてる」つて言葉を使う奴らだ。結局ひとり。でもそれでいいと思つ。なにがアタシたちをそんな風に変えてしまったのか…。人はたつたの一年で大きく変わるものなんだ…。思えば中学校に入学してからの1年間でいろんなことがあった。一番変わってきたのは三学期のはじめ頃から。もうすぐ2年になろうとする。ゆいかはいつも通りの感じ。中学一年。最近家庭の事情や学校でのことでイライラがたまってきてる。「ゆーーいつかちやーん。」後ろから声をかけてくるのはマナミ。2学期こいつとトライアブつてたけど、今はフツーに話している。マナミとはなんでもできる。そしてこれがアタシとマナミがよく話すきっかけとなつた。「次理科やーん。やだー。出たくない。」「ねね、保健室行かん??きちいー。」「おお!いいね。行く行く。」すぐアタシの考えにのつたマナミは急いで保健室へと向かつた。しかし…。追い出されてしまった。すでに授業は始まつていて、授業だけは受けたくないと思いのある事を思いついた。「ねね、じゃあさ、サンキ行かん??」サンキはこの学校の裏階段から降りてちょっと行った所にある雑貨店。マナミはすぐ行くと言つて、誰もいない事を確認して廊下から裏階段へと急いだ。「なんか楽しくね??」ういうの。マナミが興奮しながら言つた。「どうする??サンキ行ってから。」「ん??なんかキー ホルダーほしいんだよね。おソロのにしようか?!!」マナミは「二二二」しながらそう言つた。「いいね。そういんだ。でもぜんぜん罪悪感なんて感じなかつた。感じたのはただ、よ。」そしてサンキでアタシとマナミは盗みを犯した。万引きした快感だけだった。「ん~ーきつ もちいーーーーー!」「だねえーーーーー!」「

の日一人はすぐに仲良くなつた。まだ純粹な心を持っていた一月。
それから一ヶ月、アタシとマナミはずいぶん汚れた。たばこは吸う
し酒は飲むし、他中のやつらとトラブつたし。今のアタシたちに怖
いものなんかなかつたんだ。

レイプ事件

「ゆいかあ～、帰ろお～！」マナミが駆け寄ってきた。「いいよお！ねね、サンキ行こ～」「おお～いいねえ～！」そして学校帰りにサンキによる事にした。「ねえ、ゆいかつてさあ、好きな人とかいないの？？」「え～？アタシが好きな人作ると思う？？好きな人とかい別れたらばっかりだし。」「あ～ね。お前坂野のこと嫌いだったもんね。無理して付き合つけっちゃあ～」「まあねえ～。」坂野とは少し前別れたアタシの元カレ。ついぞいからいつも文句言ってる。「ねえ～。あの車なんかやばくない？？」マナミがいきなり足を止めた。「え？？なんで？？」「なんか…。こっちじろじろ見てるし…。まじキモッ～！」マナミは急ごうと黙り、その車の横を早々と通りぬけようとした。アタシはレイプなんてされるわけないしなあと思いながらマナミについて行つた。ドツツ…………後ろから叩き付けられるような激しい痛み…。アタシはすぐにこの状況を判断できた。逃げたいけど力が抜けてなにもできない。マナミ…？？マナミはすでに気を失っていた。逃げる事もできず男に体を引きずられて車に引き込まれた。「ツ～！」中にはタバコの煙と男が4人いた。どうなるんだろ…。その時はとにかく怖かった。「悪く思うなよ？？つてかお前等処女か？？」「処女？？いいねえ新鮮って感じで！」「なんだよこいつら～～まじぶん殴るぞつ～～と思いつつも力が入らない。ああ…レイプだあ…。早くやれよ。この口すべてを捨てたアタシ。マナミも同じ気持ちだったろうか…。「あつ…んん」だめだ。早く終われ～～もうだめだ。「早くなめろよ～～」「うツツ～～～～」しなかつたら殴られて反抗しようとしたら無理矢理フエラやらされてもう耐えられなかつた。「ははは…。男の吐息が顔にかかる。うえつ…。キショ～～「じゃあ、入れるから。」「えつ？～やつ～～ひょっと～～」無理矢理足を開かれた。「あつ。あ

「…」はあんつあんああんつ「泣く事しかできなかつた。運良く中出しされなかつた。はあ…。やつと終わつたんだ…。マナミ? ? ! ! 「ちよつ! ! ! マナミ? ? ! ! 」「つるせえよつ! ! ! 今降ろすから静かにしてろ! ! ! 」「ここにひきどんだけ憎んでも憎み足りないだろう。アタシとマナミは知らない道路に投げ落とされた。「ツつ…。」からだ中が痛い。「マナミ? ? 大丈夫? ? ? 」マナミは立つていられない状態だつた。「ゆ…いか? ? ? 」「中出しされてない? ? よね…? ? 」アタシがそう言つたとたんにきなつマナミの表情が変わり震え出した。「ねえ…まさか…出されたの? ? 中で…」マナミはまばたきもせずただ一点を見つめ震えていた。「こわ…かつたね…。」アタシは残つてゐる力を振り絞つてマナミを肩に寄せた。「いじじどこだろ…」知らない場所。暗くてよく見えない。誰か助けて…。誰か…アタシは立つ氣力もなくなりその場にうずくまつてしまつた。フワッ。何かがアタシの背中を包んだ。「へつ…? ? 」さつきの奴等か? ? ? やだ…やだ…。『そこ』ジャマなんだけど。」男の声。誰? ? 暗くてよく見えなかつた。「あ…」ごめんなさい…。「いいけどわあ。アンタなんでそんなとこで倒れこんでんだよ…まあ何があつたか大体わかるけどな。」アタシは我慢できずに泣いてしまつた。「うつ…」グスンッ…「怖かったよおー…つ。」「怖かったな…。」そいつは一言そつ言つてアタシを抱きしめてくれた。

「俺のうち来いよ。落ち着いたら家まで送るからさ。」「うん。」アタシは自分で立ち上がった。男はマナミを抱えてくれた。マナミの体はまだ震えている。夢じやないんだよね…。「そこらへん座つて。」「親は??」なにげなく聞く。「海外で仕事してるから。めつたに帰つてこねえよ。」「へえ。」よく見るとそいつはアタシたちと同じ歳くらいで制服をきいている。「中学生??」「ん??そうだけど何か??」「え??いや何も。」意外とかっこいい。「寒いだろ??これ着とけ。」そいつはアタシに一枚の毛布をかけてくれた。「今温かいもん入れるから。ちょっと待つてろ。」優しい香りがする。「あ。ねえ!名前は??」いきなりの質問に戸惑う…。「ゆいか。中1。」「ゆいかね。わかった。俺カズヤ。中1。もう一人の奴は今上で寝てんからさ。心配すんな。」ホントに優しい…。そしてどこか暖かい。カズヤはよく見ると震えていた。「あ…。カズヤ寒いんじゃない??」申し訳なさそうに言う。「俺はいいから!!それよりお前だよ。風邪引いてないか??」「アタシは全然大丈夫だから!!!カズヤのほつが風邪引いちやう…。」いつときアタシとカズヤは見つめ合つた。「じゃあさ、抱きしめてくれる??」カズヤはホントにかつこいい。こんな奴この世にいたのかというくらいだった。でもやつぱり柄悪いし、いかにも不良つて感じの格好…。でもカズヤの優しさにアタシは逆らえなかつた。しばらく抱き合つた。ビクツッ!!!!!!!頭を走る痛みと恐怖…。押し倒されるつ!!!!!!!あの時のことがめに浮かぶ。怖い。震えが止まらない。恐怖のあまり目をつぶつた。「お前今日泊まつていけよ。そんなに震えてたら夜道も歩けねえだろ?」「目を開くとコーヒーが置かれていた。「あんまし無理すんなよ??もう寝ていいから。俺ここいるし。」「ありがと…。でも、アタシは大丈夫だから、マナミのそばにいて…。お願ひ。」今は男

の「ことなんか気にしていられなかつた。とにかくマナ//の「ことが気が
になつてしまふがなかつた。「じゃあゆっくり休めよ。」「うん。」
ガチャツ…。ドアを開けると…。マナ//がいな。」「どうに行つた
んだ? ? ! ! ! 見ると窓が開いている…。「ま…さかな…。」カズ
ヤはねたるおそれの窓に近づいた。

恨み

「の田マナミは死んだ。自分から飛び降りたんだ。葬式。アタシは自分の友達が死ぬなんてありえないと思つていた。マナミの死を受け入れられなかつた。「ゆいか??マナミちやんのお葬式今日あるんだつて。ちやんと出なさいよ?」……。マナミが死んだ??死んでない。マナミはちやんと生きてる。生きてるんだ!!学校にも行く氣になんねえ。ガラツ…。「ゆいか!!」声をかけてきたのはゆかだつた。「最近ずっと学校休んでるから…心配したあ…。マナちゃん今日葬式だね。来るでしょ??」「…………。」「ま…まあ考えといでね!」なんだよどいつもこいつも。「じろじろ見てんじゃねえよ」ペツ。つばをはぐ。ボーッとしているとなんか気にな話が聞こえてきた。「ねえ~、なんかマナミレイプしたじやん? ??あれで中出しさせたら精神的におかしくなつちやつて窓から飛び降りたらしいよ…」「うつそ~…。ちょっとやりすぎなんじやない??」「うん。」ガツツ!!!!アタシははなしていた奴のむなぐらにつかみかかつた。「てめえその話よく聞かせる。」「えつ…。でも…。」「死にたくなかつたら言えクソツ!!!!」「わ…わかつたよ。」「坂野のしわざだよ。」なんで坂野が????「つてかさあ~、ゆいかアンタが悪いんじゃないの??アンタが坂野にいろいろするからだよ。坂野アンタの!!本気で好きだつたのに。」坂野がやつた??アタシのせいでマナミが…?「ツツツ…。ああ――――――――――――――――――――――――――――――――――ウソだ!ウソだうそだウソだああああ!!!!全部うそだよ!!!!なんかの間違いだよ!!「坂野!!!!!!坂野どこだよ!!!!?ちきしそー出て来いつ!!」このときは坂野をぶん殴ることしか考えてなかつた。「坂野つ!!!!!!」坂野はしけた顔でこっちを振り向く。「てめえふざけんなよ?!!」アタシは坂野のむなぐらにつかみかかつた。「なんだよ!放せッ。」「ふざけんな!!!!てめ

えがアタシになんかすんのは勝手だけど、マナミまで巻き込んでん
じゃねえよ!!!!」「お前が悪いんだる?俺にいちいちさしつ
すつからじやん。まあおおまかに言うと、てめえのせいでの女は
死んだつてことだな。」殴る事ができなかつた。自分がマナミを巻
き込んだ。アタシのせいだ。「俺がお前のことあきらめるわけ
ねえだろ?また大事な人がこんな風にされたくなかったら俺のと
ころに来いよ。」…………。力が抜けて「行く。また大事な人がいな
くなる。」そんなのいやだ。「聞いてんのか?ゆいか。」
……。
「まあ考えとけ。」坂野は笑つて過ぎ去つた。「うつちき
しょう。」泣く事しか出来ない。くやしい。ジーツ、ジーツ、ジ
ーツ、着信が鳴る。「はい。グスッ。もしもし?」『あ、ゆいか
??"』カズヤだ。「何??どうした??"『泣いてんのか?今
行くから!』「…………。」愛しい者がいなくなる。カズヤまで
いなくなる。アタシと一緒にいたらカズヤが。だめだ。アタシ
どうすればいいんだよ。わかなねえよ。わかなねえよ。「わかな
ねえよつ……」泣きぐずれた。「ゆいかつ!!!」カズヤ。だめだ
よ。もう会えない。アタシのせいで大切なものがなくなつてしまつ。
人の気配がする!!坂野!?後ろのほうで睨みつけている
のは坂野だつた。もうだめだ。もう会えない。「どうかした??"
「ねえ。もう、来ないで。」「え??"どういう意味だよ?」「と
にかくアタシのどこに来ないでよ。迷惑!」そういつて走り出した。
坂野の元に。「てめえ、あの男に手出したら、お前のことなんか
考えもしねえから。」「はいはい。何キレてんだよ。」グイツ!
ツツ!」いきなりアタシの腕を掴む坂野。「でももう待てねえな。
答えを出せ。あの男に手だしてほしくなかつたら俺のもんになるん
だ。」カズヤ。ごめんね。「いいよ。アンタのものになつて
やるよ。でもそのかわり、アタシ以外の人間に手出すんじゃないぞ
??"出したらてめえまじで殺す。」「はいはい。てめえは俺のもん
だよ。」坂野は笑つてカズヤのほうをみながらアタシにキスをする。
カズヤ。ごめんね。アタシアンタが好きだ。坂野は恨ん

でも憎んでも足りないだろう。でもこれでカズヤが助かるんなら、もう何もいらない。涙が頬を伝う。カズヤは失望したようにその場を去つて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6597b/>

バイブル

2010年10月22日11時58分発行